

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720040

研究課題名(和文) 19世紀のイギリスにおける道徳哲学の組織化と功利主義理論の展開

研究課題名(英文) The diffusion of Utilitarian Ideas and the Organisation of Moral Sciences in Nineteenth Century Britain

研究代表者

川名 雄一郎 (Kawana, Yuichiro)

京都大学・白眉センター・助教

研究者番号：20595920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「知の組織化」が進んだ19世紀イギリスにおいて、功利主義思想が内部に多様なアイデアを包含しながら、道徳哲学のさまざまな領域において展開されていった過程を検討することによって、功利主義思想の多様性と統一性を明らかにした。

この際には、これまでの功利主義思想史研究で一般に用いられてきたベンサム主義という枠組みだけでなく、ジェイムズ・ミルを核とした人的ネットワークがもっていた意義に着目して研究し、哲学的急進派という思想家グループの人的ネットワークや活動の一端を明らかにした

研究成果の概要(英文)：In this study, I examine how utilitarian ideas were widely diffused in various branches of moral philosophy in nineteenth century Britain, where the so-called 'Organisation of Knowledge' had gradually been processed. In so doing, I pay a special attention to the importance not only of Jeremy Bentham's theoretical influence, but also of James Mill's theoretical, practical, and personal influence among the utilitarian group, the 'Philosophic Radicals'.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：功利主義 哲学的急進派

### 1. 研究開始当初の背景

現在の功利主義思想史研究は、資料の整備の進展にともなって個々の思想家のテキストに即した内在的な研究が進みつつあるものの、当時のコンテキストのなかでそれらの議論がもっていた意味を明らかにする作業が進んでいるとは言えない状況である。また、研究対象がベンサムと J・S・ミルという有名な思想家に極端に偏っており、功利主義理論の多様性に関心が向けられているとは言い難い状況にあった。

### 2. 研究の目的

申請者の長期的な研究課題は、人間本性論から倫理学・政治学・法学・歴史学・経済学などさまざまな人文社会科学分野にわたった総合的体系としての功利主義思想を学際的に検討し、現代社会における喫緊の諸課題に取り組むための思想的基盤としての功利主義思想体系を提示することである。この長期的な研究課題の一環として、本研究では、「知の組織化」(学問分野の個別細分化・制度化)という 19 世紀イギリスを特徴づける潮流と関連づけながら、ジェームズ・ミルのもとに集った功利主義思想家たちの知的営為を検討した。この際には、19 世紀イギリスにおける功利主義思想の展開を、個々の思想家の主要著作のみを通して描かれるような単線的な理論的發展としてではなく、様々な思想家によって担われた多様な諸理論からなる包括的な知の複合体として理解することを目指した。言い換えれば、ベンサムと J・S・ミル以外の、ジェームズ・ミル、ジョン・オースティン、ジョージ・グロート、デイヴィッド・リカードなどを取り上げて、現在の研究関心の偏りを是正しつつ、未公開資料も分析対象にすることによって、功利主義社会思想の多様性を明らかにすることを目指した。

このように本研究では、功利主義の議論の内在的な理解に努めつつ、それを知の組織化という社会的文脈のなかに位置づけて読み解くことで、功利主義理論の多様性についての理解を深めることを目的とした。

### 3. 研究の方法

研究に際しては、以下の 2 つの具体的な観点を関連づけつつ功利主義思想の多様性を分析した。

「知の組織化」と功利主義理論：19 世紀イギリスは現在の私たちにとっても馴染み深い学問区分が現れ、個々の学問分野の個別的發展が始まる時期であった。この「知の組織化」にとって重要な契機・指標となったのが大学における教授職・教育課程の設置であった。しばしば看過されがちであるが、この観点から注意が払われるべきなのは、功利主義思想家の諸著作が 19 世紀イギリスの大学の教育課程において標準テキストとして用

いられ広範な影響力をもっていたという事実である。功利主義思想家の議論は高等教育機関においてテキストとして採用され、知の組織化が進んだ 19 世紀イギリスにおいて、この流れに相応しい「科学的」議論として急速に普及していったのである。

本研究では、このような功利主義の普及過程をデイヴィッド・リカード(経済学)、ジョン・オースティン(法学)、ジョージ・グロート(歴史学)をとりあげて、それぞれの分野において功利主義思想がとった多様な形態を検討するとともに、支配層に対して厳しい批判を展開していた急進派であった彼らの著作がどのようにして高等教育を通じて支配層に受容されていったか、その過程で功利主義理論がどのように発展し解釈の変容を蒙ったかという点について「知の社会史」的な観点を援用しながら明らかにした。このことによって、「知の組織化」が進んだ 19 世紀イギリスにおいて、功利主義社会理論が内部に多様なアイデアを包含しつつ展開されていった過程を明らかにした。

ジェームズ・ミルを核とした人的ネットワーク：本研究では多様な功利主義思想家を取り上げたが、彼らの理論や実践をベンサムではなくジェームズ・ミルを中心とする人的ネットワークという枠組みの中で捉え、このような観点から功利主義思想の多様性と統一性を明らかにした。

ジェームズ・ミルを核とした人的ネットワークへの着目は、急進派であった功利主義者の議論が、知の組織化が進み個々の分野がディシプリンとして成立していく過程でどのようにして支配的な影響力を持つようになったかを理解するためにも不可欠であった。この点に関して留意すべきは、急進派サークルの中で指導的地位にあったジェームズ・ミルが支配層のウィッグ思想家・政治家とも強いつながりを持ち協力関係を築いていたという事実である。例えば、ジェームズ・ミルがオースティン等とともに関与し、当時からその急進的・反支配層的立場が強調されていたロンドン大学の創設(1826 年)という事業も支配層であったウィッグ派の協力なしには不可能であり、この協力・妥協関係は同大学の教員の人選やカリキュラムにも反映されていた。功利主義思想の普及を研究する際には、このような功利主義思想家を取り巻いていた人的関係がどのような制度的帰結をともなっていたかを、急進主義というレッテルにとらわれることなく検討した。

この研究では、ジェームズ・ミルを中心とした人的・思想的ネットワークを考察することによって、このような知的コンテキストの中で生み出されてきた功利主義社会理論の歴史的再構成をおこなった。

### 研究手法について

思想史方法論は 20 世紀後半に大きな論争を経験し、「思想の歴史的再構成」を遂行す

るための方法論的基礎が洗練されてきた。本研究では、いわゆるコンテキスト主義的な方法論を適用して研究を行った。

本研究において「思想」として検討の対象としたのは、単に著書や論文、書簡などの書かれたテキスト（言語的テキスト）だけでなく、実践的な活動（非言語的テキスト）もふくめた広い意味での人間の知的活動全般である。そして、このような思想を「歴史的」に再構成するというのは、思想をそれを担った思想家が実際に生きていた状況や背景（歴史的コンテキスト）において生み出され、それらによって特徴づけられる具体的・個別的な知的営為とみなし、その具体性・個別性を明らかにすることを目的とするということである。

2011年度には、(1) ジョージ・グロートの議論の検討、および(2) 19世紀イギリスにおける「性格の科学」の展開についての分析をすすめた。

(1)については、とくにグロートの1810年代後半から30年代初頭の哲学的急進主義の立場からの政治活動について、公開されている一次文献の収集・分析をすすめるとともに、イギリスのブリティッシュ・ライブラリー、ロンドン大学図書館およびユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン図書館に所蔵されている未公開資料の収集・分析をすすめた。この時期のグロートがベンサムやジェイムズ・ミルといった功利主義思想家の大きな影響下にあったことはこれまでも指摘されてきているが、その具体的な内実はずしも検討されてきてはならず、本研究では、とりわけ未公開資料に基づいて、この影響関係の内実を明らかにする作業をおこなった。

(2)については、骨相学、オーエン主義、エソロジーという3つの流れを取り上げて、これらの科学の間の対抗関係を念頭に置きながら、「性格の科学」をめぐる19世紀前半のイギリスの歴史的文脈を明らかにした。とりわけ、骨相学とオーエン主義が細部の意見の相違を含みながらも協調関係にあったこと、J・S・ミルとA・ベインによるエソロジーという試みが、骨相学とオーエン主義の決定論的傾向に対する試みであったことの含意を検討した。この研究は、19世紀イギリスにおける「知の組織化」のプロセスを、心理学の発展というテーマと関連付けつつ検討する研究の一部としての意味ももっている。

2012年度には、ジェイムズ・ミル、グロートについて、ブリティッシュ・ライブラリー、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン、ロンドン・ライブラリーなどに所蔵されている未公開のものをふくめた一次資料および二次資料の分析を進めた。

ジェイムズ・ミルについては、歴史学が政治学において果たす役割についての認識および古典古代に対する見解を、主に未公開資

料に拠りながら検討をすすめた。グロートについては、これまでさまざまに論じられてきてはいるものの曖昧な点のあったベンサムやジェイムズ・ミルとの関係について再検討をすすめるとともに、グロートが歴史学という学問についてどのような認識をもっていたかについて検討した。

また、ジェイムズ・ミルを中心として、グロート、デイヴィッド・リカード、ジョン・オースティンといった哲学的急進派として言及される思想家グループの（およびその外部との）ネットワークについて分析をすすめる、政治的立場と理論的見解の複雑な関係についても分析をすすめた。

2013年度には、(1) 哲学的急進派の民主主義観の多様性、(2) ベンサムの共和主義、(3) 19世紀イギリスにおけるミル『論理学体系』の普及過程について分析を進めた。(1)については、主にベンサム、グロート、ミル父子の（代議制）民主主義に関する見解を比較し、単純に功利主義的民主主義論として一括りにすることのできない認識の多様性を詳細に検討した。

(2)については、イギリス国制の急進的改革を主張し、君主や貴族の存在しない「純粋な民主主義」が政治的安定や経済的繁栄と両立している実例をアメリカに見出し、アメリカの代議制民主主義を教条的に賞賛していたベンサムのアメリカに対する評価がアメリカについての正しい認識に基づいていたのかを、言い換えれば、ベンサムがアメリカの政治制度の特質を正確に理解していたのかを検討した。その際には、『フェデラリスト』（なかでもマディソン）の議論との類似性に着目した。

(3)については、『論理学体系』の詳細な内面的分析を進めるとともに、ミルの議論をとりまいていた19世紀のイギリスにおける論理学・科学方法論をめぐるコンテキストの分析を進めた。とりわけ、『論理学体系』を執筆する際にミルが彼以前の論理学の伝統をどのように理解していたか、そして自らの著作の論敵や読者層としてどのような人々を念頭に置いていたのかという点に着目して研究をすすめた。

#### 4. 研究成果

研究成果は学会報告や論文・著書の形でまとめて公表した（なお、論文執筆・投稿の段階でまだ公表されていない論文・著書がある）。

川名雄一郎、「19世紀前半のブリテンにおける性格の科学の展開」では、19世紀前半のブリテンにおける「性格の科学」の展開について、骨相学、オーエン主義、エソロジーという3つの流れを取り上げて、これらの科学の間の対抗関係を念頭に置きながら、「性格の科学」をめぐる19世紀前半のブリテンの

歴史的文脈を描き出すことを目的とした。

最初に検討した骨相学は、人間の性格と頭蓋の形態の関係に着目することによって人間の本性や性格を研究する生理学理論であり、1790年代にウィーンの医師F・J・ガルによって発展させられ、19世紀前半のブリテンにおいて一世を風靡したものであった。骨相学が広範に普及した要因は、精神・性格という不可視のものを頭蓋の形状や大きさに還元することによって可視的な、いいかえれば「科学的」に観察可能なものとしたこと、また、そうすることによって教育や性格形成という実践に「科学的」な基礎づけを与えることに成功したことにある。重要なのは、元来は性格の固定性を強調する議論として提示されたはずの骨相学が、19世紀初頭のブリテンにおいて普及する過程においては、教育による性格の形成・修正の可能性を強調する議論として広範な影響をもつことになったということであった。

次に検討したオーエン主義の特徴はその環境決定論にあり、この理論は人間の性格はもっぱら彼を取り巻いている環境によって形成されたものであると主張していた。さらに、この見解から、性格は環境によって形成され各人がその形成に関与できないがゆえに、各人は自分自身の性格およびその結果として生じる行動にたいして責任を問われるべきではないという主張が引きだされていた。オーエン主義者は骨相学者と論争をおこなっていたが、彼らの骨相学に対する態度は全面的批判というよりも、同じ陣営の中での意見の対立といった側面も強いものであった。こうして、オーエン主義も骨相学と同様に、性格形成における教育の重要性を（骨相学者以上に）強調することになった。

このように、骨相学とオーエン主義というふたつの性格形成理論が共通してもっていた興味深い傾向は、ともに理論的には決定論見地に立っていたにもかかわらず、性格の可変性を強調するようになっていたことである。最後に検討したエソロジー（性格形成の科学）はJ・S・ミル（およびA・ペイン）によって提示された未完の構想であったが、この構想は骨相学およびオーエン主義が性格の可変性に対する認識にもかかわらず基底としてもっていた「誤った決定論」に対する批判の試みであったといえることができるものであった。

川名雄一郎、「哲学的急進派と民主主義」では、ベンサム、ジェームズ・ミル、ジョージ・グロート、J・S・ミルの（代議制）民主主義に関する見解を比較・分析した。

ジェームズ・ミルの代議政治論（とりわけ「政府論」における）はしばしば功利主義的擁護論として言及されるものであるが、それは自己利益優先原理を前提としつつ、支配者の権力の濫用を防いで社会の多数者の物質的利益を擁護することで最大多数の最大幸福を達成することを統治の目的とみなすよ

うなものであった。彼はこのような観点から、均衡理論や階級代表理論にもとづくブリテン国制擁護論を批判していた。彼の考えでは、シニスター・インタレストを持っていないのでは人民のみであり、その人民の利益を増進することができる政体は代議制民主主義だけであった。

1820年代のグロートはベンサムとジェームズ・ミルの強い影響のもとで、急進的改革を主張するパンフレットを著していた。彼の議会改革論は基本的にはジェームズ・ミル「政府論」の引き写しであった。また、グロートの思索を特徴づけているのは古典古代への関心であり、彼のギリシア研究の最初の公表された成果として「古代ギリシアの制度」（1826年）があるが、そこで彼はミットフォードの議論が批判しつつ、アテネの民主主義が高く評価していた。その議論においては、アテネの民主主義の長所が公開性とそれに基づく討論に見いだされていたが、それは世論と公開性に関するベンサムの議論を容易に連想されるものであった。さらに、グロートは、このようなベンサム的・ジェームズ・ミル的な見地からだけでなく、個人が才能を発揮するのにもっとも適した政体であるという観点からもアテネの民主主義を評価していたが、このような観点はJ・S・ミルの議論を特徴づけるものでもあった。

J・S・ミルはいわゆる「精神の危機」以前には、ベンサムやジェームズ・ミルの議論にしたがって、支配者と被支配者のあいだの利益の一致を可能にする唯一の政体としての代議制民主主義を高く評価していたが、危機後には代議制民主主義の絶対的有用性に疑問をもち、政治制度の問題を「道徳的・教育的な問題」とみなすとともに、あらゆる制度の有用性はそれが存立する社会状態に左右されるという見地に立って「政治」に対する「社会」の優越を強調するようになった。そのような彼の認識にとって重要な役割を果たしたのが、彼の歴史論と性格形成論であった。

川名雄一郎、『社会体の生理学』によって、1830年代から1840年代のミルの思想の展開を時系列に従いつつトピックごと（アメリカ論、文明論、科学方法論、歴史論、性格形成論、経済学、アイルランド論）に分析していく作業をタテ系とし、それぞれのトピックをめぐる同時代の歴史的コンテキストの分析をヨコ系として合わせることによって、単なるミル研究にとどまらない、ミルの思想を中心とした19世紀イギリス思想史研究を意図した研究を成果として公表した。同書は、成熟期と呼ばれる時期の著作群の分析に比重が置かれてきたこれまでの研究に対して、1830年代から1840年代の思索を分析対象として、この時期の思索がそれ自体として有していた重要な意義を明らかにした。このことによって、これまでほとんど検討されることなく軽視されてきたミルの歴史論や性格形

成論がミルの思想の理解のためにきわめて重要な意味をもっていることを明らかにした。また、ミルの思想の内在的分析の点でも、18世紀啓蒙との関連（同書第2・4・6章）、哲学と社会科学、社会科学内部の諸領域の関連（同書第5章）など、これまで正確なテキスト読解に基づいた議論がなされてこなかった主題について、『論理学体系』を中心とした一次文献の厳密な読解によって、一貫した解釈を示した。

さらに、研究活動の一環として、研究課題に係る重要文献の翻訳を出版した（フィリップ・スコフィールド著、川名雄一郎・小畑俊太郎訳、『ベンサム 功利主義入門』）

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計3件）

川名雄一郎、「19世紀前半のブリテンにおける性格の科学の展開」、イギリス哲学会第44回関西支部例会、2011年7月2日、キャンパスプラザ京都。

川名雄一郎、「哲学的急進派と民主主義」社会思想史学会第38回大会、2013年10月27日、関西学院大学。

川名雄一郎、「有江大介編『ヴィクトリア時代の思潮とJ. S. ミル』三和書房、2013年をめぐる」、経済学史学会2013年度第1回関西支部会、2013年10月5日、東洋大学。

〔図書〕（計2件）

川名雄一郎、『社会体の生理学 ジョン・スチュアート・ミルと商業社会の科学』、京都大学学術出版会、2012年。

フィリップ・スコフィールド著、川名雄一郎・小畑俊太郎訳、『ベンサム 功利主義入門』、慶應義塾大学出版会、2013年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川名雄一郎 (Kawana Yuichiro)

京都大学・白眉センター・特定助教

研究者番号：20595920